

## 福島県に現存する室町期・方三間仏堂の平面構成と意匠に関する一考察 方三間仏堂の成立と普及に関する基礎的研究 その1

A study on the style and characteristic of "Ho-Sangendo" style in Buddhism Temple

○重枝 豊\* 大山亜紀子\*\*

### はじめに

これまで方三間仏堂の変遷について、阿弥陀堂、薬師堂、観音堂の類型的な検証を試みてきた<sup>註1</sup>。しかし、同一地域において同時期に造営された寺院における様式選択や技法については検討できていない。今後、各時代・各地域の方三間仏堂の検証をすすめるが、本稿では室町期に造営された福島県に現存する三間堂（原則として方三間堂としたが一部梁間四間のものも含めた）10棟について検討を加えたい。

### 1. 福島地域の方三間堂の概要

福島県に現存する方三間堂は近世までに造営が確認されている遺構は25棟で、平安末期1棟、室町期10棟、江戸期14棟である。室町期の遺構の様式は7棟が禅宗様を、3棟が和様を主としている。江戸期になると禅宗様・和様を主とする遺構数はともに7棟で拮抗している。また、室町期全遺構の屋根は茅葺きで、江戸期になって瓦葺きの遺構が出現する<sup>註2</sup>。

方三間仏堂に向拝が付加される事例は室町後期から（有田阿弥陀堂・和歌山県）であるが、この地域においても室町後期に向拝を持つ事例が出現する（No.09, 10）。室町期造営の10棟の平面、構造、細部意匠について比較することによって方三間仏堂の成立・普及過程について考察を加えたい。

### 2. 平面構成と正面（桁行）の寸法構成について

方三間仏堂はほぼ方形の平面に回縁を廻し、原則として正面にのみ木階または石階を設ける。西光寺阿弥陀堂は2方向のみに縁を廻す特殊例である。内部に須弥壇を設けそこに厨子を安置する。その場合に来迎柱を側柱の柱筋に合わせて計画する場合と、来迎柱を後退させる事例がある。最初に正面の縁、側柱、中央柱の寸法関係に着目したい。脇間と中央間が同一寸法で構成されているのは1例（No.01）のみで、残りは脇間を基準

とすると1.13倍～1.5倍の範囲で構成されている。中でも脇間と中央間の比率を2:3とする事例が4例ある（No.02, 03, 04, 07）。また同比率を3:4とするもの（No.10）、4:5とするもの（No.09）があり、それら以外では中央間を1割から2割広く決定している。中央間の実寸法は6尺4寸から10尺までと幅広く用いられていることから、脇間と中央間に基準を設けていたことは明らかである。縁幅の実寸は3尺6寸から5尺5寸の事例まであり、脇間の5割に満たないものから、脇間の8割に達するものまであり、柱間寸法とは異なり、縁幅はプロポーションを整えるために自由に用いられたとみられる。

### 3. 梁行の寸法構成について

側面が4間の事例（No.10）を除くと、創建時期の古い旭田寺観音堂（No.01）のみが4本の主柱（来迎柱）を用いているのに対して他は2本の来迎柱を用いて、前面2本の柱を抜いている。次に、側柱筋と来迎柱筋が揃っている場合と、来迎柱筋を後退させる事例がある。正面の側柱・柱間（脇間・中央間）と側面の側柱・柱間は同一の場合が多く、正面・側面で柱間を変更しているのは2棟（No.08, 10）である。勝福寺観音堂（No.10）では正面の脇間寸法を側面4間に用いている。西光寺阿弥陀堂（No.8）は不規則な柱割りを示しており、正面・側面の関係性は明らかではない。以上を整理すると、側柱の関係は正面・側面を同一基準で用いている事例が多く（8棟）、総柱間を割り直す事例（No.01）、側面脇間寸法で側面の柱間を構成している事例（No.10）がみられる。このことは正面方向の側柱と側面の方向の側柱の関係性を崩さずに計画がなされているといえる。

次に来迎柱の位置について検討したい。側柱筋と2本の来迎柱を揃えて前方の柱を抜いているのは4棟で（No.

02, 03, 06, 07) で後方の側柱筋から来迎柱を後退させているのが4棟 (No.04, 05, 08, 09)、旭田観音堂では正面総柱間を4分割して側面に1:2:1に割り直している。勝福寺観音堂では前述したように側面側柱を4間にして処理している。

#### 4. まとめ

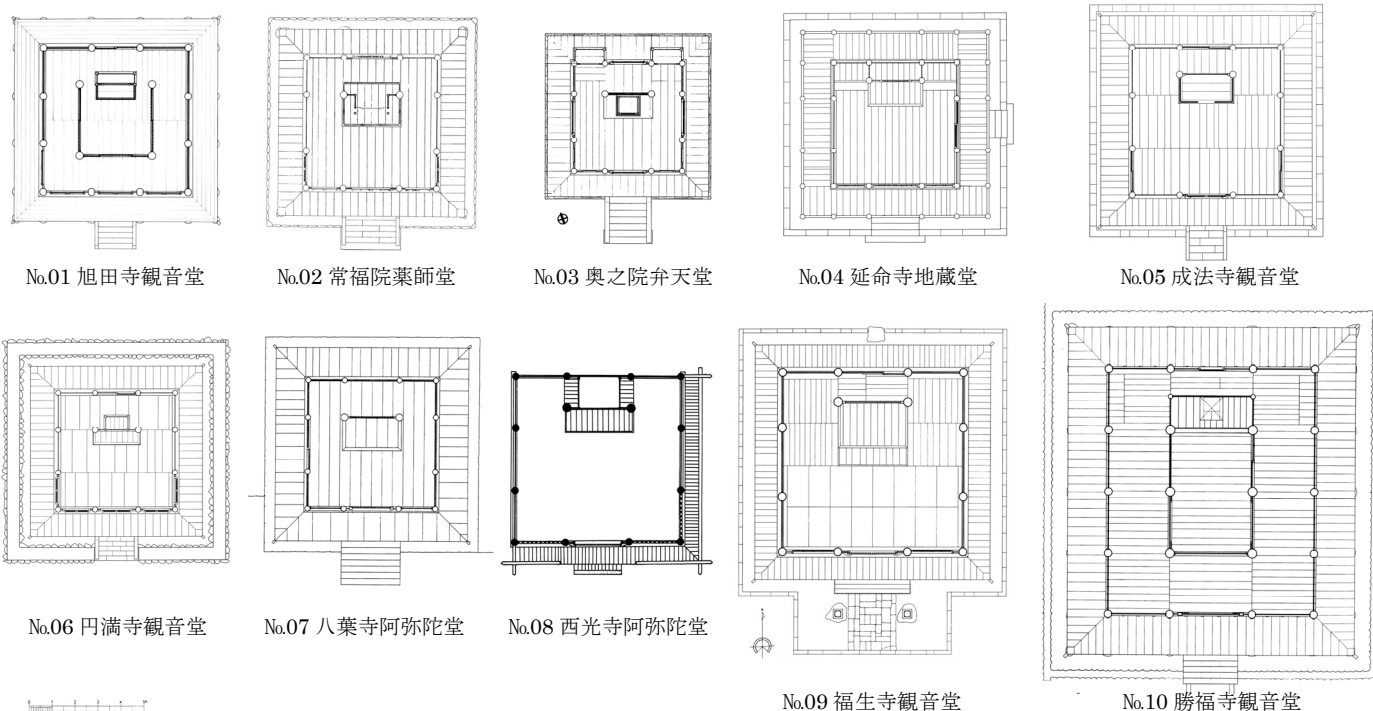
以上のことから14世紀末から15世紀初頭にかけて正面・側面の柱割りを同一にして来迎柱を側面柱筋にあわせる事例 (No.02, 03, 06, 07) と、後退させる事例 (No.04, 05, 08, 09) に区分されることがわかった。室町期最初期の事例である旭田寺観音堂では側柱と主柱 (来迎

柱) を割り直しており、勝福寺観音堂では側面を4間にして正面と側面の柱筋を揃えて計画している。この地域で最古の遺構である願成寺 (白水) 阿弥陀堂では前面2本の主柱を抜くことなしに処理している。

平面寸法の分析から明らかになったことを踏まえ、次稿では断面構成を中心に架構と平面構成との関係を明らかにしたい。

注1) 佐藤久、重枝豊、大山亜紀子他『方三間仏堂の特質と展開に関する基礎的研究—阿弥陀堂、薬師堂、観音堂の平面と架構形式の分析を中心として—』2009日本大学理工学部修士論文

注2) 『近世社寺建築調査報告書集2 北海道東北地方の近世社寺建築2』東洋書林 昭和56年



事例	所在地	年代	指定	規模	屋根	様式	屋根	向斜/蓋階
1 旭田寺観音堂 (中之沢観音堂)	下郷町中妻字観音前	室町前期(14世紀半)	重文	桁行3間・梁間3間	銅板葺(旧茅葺)	和様	寄棟	—
2 常福院薬師堂 (田子薬師堂)	会津美里町新屋敷山王塚	応永6年(1399)	重文	桁行3間・梁間3間	銅板葺(旧茅葺)	禅宗様	入母屋	—
3 奥之院弁天堂	柳津町柳津字門前町	応永年間(1400年頃)	重文	桁行3間・梁間3間	茅葺	禅宗様	宝形	—
4 延命寺地藏堂 (藤倉二階堂)	会津若松市河東町倉橋字藤倉	室町後期(15世紀末~16世紀半)	重文	桁行3間・梁間3間	本瓦葺(旧茅葺)	禅宗様	寄棟	裳階付
5 成法寺観音堂	只見町梁取字仏地	室町後期(16世紀初頭)	重文	桁行3間・梁間3間	茅葺	禅宗様	寄棟	—
6 円満寺観音堂 (出が原観音堂)	耶麻郡西会津町下谷字宮ノ後出が原	室町末期(16世紀半)	重文	桁行3間・梁間3間	茅葺	和様	入母屋	—
7 八葉寺阿弥陀堂 (冬木沢阿弥陀堂)	会津若松市河東町広野字権現塚	文禄年間(16世紀末)	重文	桁行3間・梁間3間	茅葺	禅宗様	入母屋	—
8 西光寺阿弥陀堂 (田口阿弥陀堂)	東白川郡古殿村田口	室町後期(16世紀半)	県重文	桁行3間・梁間3間	茅葺	禅宗様	宝形	—
9 福生寺観音堂	会津美里町富川字富岡甲8	室町後期(16世紀半)	重文	桁行3間・梁間3間	鉄板葺(旧茅葺)	禅宗様	宝形	一間
10 勝福寺観音堂	喜多方市関柴町三津井字堂ノ上630	室町後期(16世紀半)	重文	桁行3間・梁間4間	茅葺	和様	宝形	一間